葛藤場面における他者との関わりとアイデンティティの関連

奥田紗史美*・前田健一*・岡本祐子*

The relationship between identity and commitment to others in the conflict situation

Satomi OKUDA , Ken-ichi MAEDA , Yuko OKAMOTO

The purpose of the present study was to investigate the relationship between identity development and commitment to significant others. Data were obtained on the base of questionnaire distributed to 193 unversity students. The questionnaire was consisted of 12 items to measure identity development and 24 items to assess the developmental level to relate others in the conflict situations. The main results were the followings: ① The developmental level of identity and commitment to others had statistically significant correction. ② Women's level of commitment to others was significantly higher than that of men. These results suggested that commitment to others had a important role for identity development in adolescence.

Keywords : identity, relationship to significant others, conflict situation, meaning of others

問題と目的

アイデンティティの概念は，元来，Erikson（1950）による精神分析的個体発達分化の図式における，青年期の心理社会的危機を示すものとして出発した．人間は思春期，青年期において，「自分は何者か」というテーマに直面する．すなわち，アイデンティティとは，幼児期以来，父母や周りの大人の考え方や行動を受け入れ，そのようにふるまうことで形成されてきた同一化や自己像が，青年期に取捨選択されて再構成される，斉一性，連続性，統合性を持った自我の確立の状態である．

初期のアイデンティティ研究では Erikson (1950) の青年期の発達・病理の研究や Marcia (1966) のアイデンティティ・ステイタス研究に代表されるように，個としての発達の側面を中心に研究が進められてきた．すなわちその研究の多くは青年期の男性のみを対象とし，自己の確立や他者からの分離を発達の最重要課題とみなしてアイデンティティ理論が展開されていた．しかし，Erikson

*広島大学大学院教育学研究科（Graduate School of Education, Hiroshima University）

(1950) がアイデンティティ理論を提唱して半世紀が過ぎた現在，人間のライフサイクルや価値観の多様化にともない，従来のアイデンティティ理論では説明できないことが多くなってきた．その流れの中で，現在のアイデンティティ研究は，他者からの分離や自立といった側面ばかりでなく，関係性，つまり他者との関わりのなかでアイデンティティが発達，深化していく側面への関心を高めている．

人間は，それぞれ固有の世界を持つ個的存在でありながら，同時に他者との関わりなしには生きていくことが出来ない関係的存在であることは，改めて述べるまでもない．特に，個人の発達にとって関係的側面の持つ意義が重要視されてこなかった研究の背景について，岡本 (1995) は，以下のように述べている．20 世紀後半の心理学の主要な関心と中心的研究課題は，個の達成，しかも西洋的，男性的な枠組みにおける自我の発達であった．個の確立と個人の自由は，20 世紀後半の時代精神の主軸を担ってきたと思われるが，心理学の世界においても，分離－個体化を軸にした西洋的，男性的な自我の研究が重視され，それが我が国においてもそのまま移入される傾向にあった．また，男性研究者による男性をモデルとした発達研究が中心であったこともその一因であろう．そういう潮流の中で，「他者との関係性」の問題は，ともすれば，自我の発達の一部分，あるいは背景的要因としてとらえられる傾向があった．もしくは，関係性の概念は「女性性」，「女性的要因」に類似した特質を持っているために，重視されることが少なかったとも考えられる．

以上のような背景から，当初アイデンティティ研究における「関係性」の問題は，男性と女性のアイデンティティの違いを説明するものとして扱われていた．かつての人々の生き方は「男は仕事，女は家庭」という伝統的な性役割観に裏付けられ，長く受け入れられた固定されたパターンであり，アイデンティティの形成は，男性では職業選択や経済的自立といったテーマに見られるような，個の確立や分離—個体化の視点から，女性では配偶者選択や出産・育児などに代表されるような，重要な他者との関係性の視点からとらえられ，関係性の視点は女性に限定されることが多かったのである．しかし，1980 年代以降女性の社会進出にともない，社会と家庭の双方で男女が同じ役割を担うことが多くなり，次第に上記の視点の相違からアイデンティティの性差を論じる意味が失われてきた．現在では，個としての発達の側面と，関係性の中での発達の側面という二つの側面が，アイデンティティ発達においてはどちらも重要なものであり，それゆえ関係性の視点は男女両方のアイデンティティに関わるものとしてとらえられつつある．

関係性の視点からみたアイデンティティ発達の研究は，現在大きく二つの動向があると考えられる．一つは，Josselson (1994) や，杉村 (1998) に代表されるような，個としてのアイデンティティというものが，関係性の中に包含され，他者との関係のなかで形成，発達されていくとの考え方である．もう一つは，アイデンティティを，自分は何者であるのかというような「個としてのアイデンティティ」と，自分は誰のために存在するのかというような「関係性にもとづくアイデンティティ」という 2 つの軸から捉えようとする岡本 (1997) の立場である．さらに，前者は主に青年期を対象としているのに対し，後者では成人期を対象としている．しかし，いずれにせよ，もはやアイデンティティを個としての自立，他者からの分離独立といった視点からのみ捉えることには問題があると考えている点で両者の見解は一致している．このように，個としての発達に加えて，ア

イデンティティには重要な他者との関係性が大きく関わっているという考え方が，男女や発達段階を問わず現在のアイデンティティティ研究において重要になっている．

では，「関係性」とは具体的に何をさすのであろうか．杉村（1998）は，青年期におけるアイデンティティ形成は，自己の視点に気付き，他者の視点を内在化すると同時に，そこで生じる両者の視点の間の葛藤や矛盾を相互調整により解決するプロセスであると指摘した．アイデンティティ形成の中心的な作業である探求（exploration）は，自己の欲求・関心のみではなく他者の意見・期待も考慮したり，相談や討論といった形で他者を利用したり，自己と他者の視点の食い違いを交渉などの手段で解決しながら，人生の重要な選択を決定していくことである．そして，この様なアイデンティティ探求のプロセスにおける自己と他者の関係の認識を「関係性」と呼んでいる．しかしながら，このようなアイデンティティという概念のとらえなおしに基づいた実証研究はまだほとんどなく，Josselson（1994）と，Kroger（1997）の研究があるのみである．また，これらの研究は，この分野において先駆的な意義を持つが，主として成人期を対象としている（杉村，2001）．

本研究では，以上のような「関係性」を重要な視点としてアイデンティティ発達をとらえようとする立場に立脚し，青年期のアイデンティティ形成と，重要な他者との関係性の関連を明らかにすることを目的とする．特に本研究では，具体的場面を想定し，その状況のなかでの関係性のレベルを評価する．

永田（2002）は，生涯発達的視点からライフサイクルを通した重要な他者との関係性の連続性・不連続性の可能性について検討し，関係性の発達においては，葛藤体験にいかに取り組むかということが重要な鍵となることを示した．これを受けて，本研究では重要な他者との葛藤場面における具体的場面を設定し，①その葛藤場面に対する対処方略における関係性のレベル，②その葛藤体験に対する意味づけの深さという２つの観点から，全体的な対人関係性をとらえることとする．本研究では，葛藤場面対処方略における関係性のレベルを，杉村（2001）を参考に Table 1 のように定義する．Table 1 に示したように，高いレベルの関係性を定義するための，鍵になる概念として，「相互調整」があげられるが，このことについて，Josselson（1994）は，青年期全般にわたって，他者の欲求や興味を考慮する一方で自分自身を表現したり，葛藤を認識して解決し，あるいは解決できない葛藤があっても他者との結びつきをなお持続することを学びつづける努力こそが，相互調整であると表現している．

Table1．葛藤場面対処方略における関係性のレベル

高いレベル	低いレベル
このレベルの青年では，人生の選択や，決定のプロセスにおいて，自己と他者の視点について認識することができる．そして両者の食い違いによる葛藤を解決する手段として，自己の意志を押し通したり，他者の意見を鵜呑みにすることなく，他者の視点を取り込みながら，自己と他者のあいだで相互調整をする．	このレベルの青年では，人生の選択や，決定のプロセスにおいて，自己と他者の視点について認識することができない，あるいは単に他者の視点をコピーしている．そして両者の食い違いによる葛藤を解決する手段として相互調整を用いることができず，ただ自分のやりたいように推し進める自己中心的な方略をとったり，逆に他者の意見に盲従し他者依存的に解決を図ろうとする．

*杉村（2001）を一部改変

また，意味づけとは，関係性の中での体験について何らかの反省をしたり，そこで起こったことを自分なりに解釈したり，あるいは体験をめぐって相手と話しあったりというようなことに表われている（杉村 1999）.

本研究は，対人葛藤場面を想定することを踏まえたうえで，体験に対する意味づけを，「その体験を通して，自己理解，他者理解，対人関係の調節の難しさや意義の理解をしたと考えること」と定義し，対人葛藤場面の対処方略における関係性のレベルとあわせて，同じ具体的対人葛藤場面に対する意味づけの深さを調べることにより，青年期における対人関係性とアイデンティティとの関連を検討する.

方　法

対象者

対象者は，国立大学教育学部に在籍する男子学生 64 名，女子学生 129 名の計 193 名であった. 学年は 2 年生～4 年生，年齢は 19 歳～24 歳の範囲であり，その平均は 20.7 歳であった.

手続き

以下の内容からなる質問紙調査を行った.

(1) アイデンティティ尺度

Rasmussen（1961）の Ego Identity Scale を翻訳，標準化した 61 項目からなるアイデンティティ尺度のうち下位尺度Ｖの 12 項目を使用した.

(2) 対人関係性尺度

青年期において重要であると考えられる他者 3 者（両親，友人，恋人）と，それぞれに対応させた具体的葛藤場面を設定し，それら 3 つの葛藤場面における対人関係性について測定した. 両親との関係では職業選択における葛藤場面，友人との関係では学業における葛藤場面，恋人との関係では結婚における葛藤場面をそれぞれ設定した. 尺度項目は，3 つの場面それぞれについて，関係性のレベルを測定する項目 4 項目，葛藤体験に対する意味づけの深さを測定する 4 項目の，計 24 項目（3 場面×8 項目）であった.

なお，「対人関係性尺度」の具体的な質問項目は，論文の最後に補助資料として添付した.

調査は 2002 年 12 月に行われた.

結　果

アイデンティティ達成

Rasmussen のアイデンティティ尺度Ｖ段階の 12 項目それぞれについてどの程度当てはまるかを，各対象者に「1. まったく当てはまらない」～「6. 非常に当てはまる」までの 6 段階で評定させた. それらの得点を合計した点数を，対象者のアイデンティティ得点として算出した. アイデンティティ得点の平均値は 47.11（SD=7.21）であった.

アイデンティティ得点に性差が見られるかどうか検討するため，t 検定を行ったところ，アイデ

ンティ得点の各平均値は男性が M=47.84 (SD =6.62)，女性が M=46.74 (SD=7.39)，t=1.03 で，有意差は見られなかった．

対人関係性

本研究では，青年期の対人関係性を測る尺度として，具体的な葛藤場面における対処方略の関係性のレベルを測る尺度（以下，関係性尺度）と，葛藤体験に対する意味づけの深さを測る尺度（以下，意味づけ尺度）の２つを用い，その２つの観点から対人関係性をとらえた．関係性尺度では，４つの各項目にあげた葛藤場面対処方略に対してどの程度賛成できるかを，対象者に「1．反対」～「4．賛成」までの４段階で評定させた．意味づけ尺度では，４つの各項目にあげた意味づけの内容に対してどの程度そう思うかを，「1．反対」～「4．賛成」までの４段階で評定させた．重要な他者三者との葛藤場面（３場面）それぞれにおける関係性尺度４項目の得点を合計したものを「関係性得点」（項目１及び３は逆転項目），また意味づけ尺度４項目の得点を合計したものを「意味づけ得点」（項目 1 は逆転項目）とした．関係性得点と意味づけ得点，また，それらの下位尺度得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示した．また，関係性得点と意味づけ得点間の相関係数を算出したところ，r=.50,p<.001 で，有意な正の相関が見られた．Table 3 は関係性尺度と意味づけ尺度の下位項目間の相関係数を示したものである．＜関係性・両親＞と＜意味づけ・友人＞尺度間の相関値は，r=.18,p<.05 で低かったが，その他の相関値はほとんどすべての項目間で，比較的高い正の相関が見られた．

Table 2. 対人関係性尺度の下位尺度得点平均値

	M	*SD*
関係性・両親	12.36	1.40
関係性・友人	12.55	1.57
関係性・恋人	12.88	1.58
関係性得点	37.79	3.63
意味づけ・両親	13.24	1.92
意味づけ・友人	12.72	2.06
意味づけ・恋人	13.75	1.82
意味づけ得点	39.70	4.83

Table 3.　関係性尺度と意味づけ尺度の下位項目間の相関係数

	関係性			意味づけ		
	両親	友人	恋人	両親	友人	恋人
関係性・両親	−	.38***	.44***	.30***	.18 *	.22 **
関係性・友人		−	.52***	.29***	.36 ***	.39 ***
関係性・恋人			−	.31***	.30 ***	.56 ***
意味づけ・両親				−	.55 ***	.47 ***
意味づけ・友人					−	.60 ***
意味づけ・恋人						−

***p<.001,**p<.01,*p<.05

Table 4 には，対人関係性尺度得点における性差の t 検定の結果を示した．関係性得点では t=4.44,p<.001 で，有意差がみられ，女性のほうが男性よりも高く，意味づけ得点でも t=1.92,p<.10 で，女性が男性よりも高い傾向を示した．下位尺度の得点では，関係性の下位尺度得点はすべての項目において男女間で有意差が見られた．意味づけの下位尺度得点では両親との葛藤場面において t=2.02,p<.05 で有意差が見られ，友人との葛藤場面において t=1.78,p<.10 で差のある傾向が見られたが，恋人との葛藤場面においては有意差は見られなかった．

Table 4.　関係性と意味づけにおける性差のt検定結果

	男性		女性		t値
	M	(*SD*)	*M*	(*SD*)	
関係性・両親	11.95	(1.50)	12.56	(1.32)	−2.75**
関係性・友人	11.88	(1.72)	12.89	(1.38)	−4.43***
関係性・恋人	12.33	(1.73)	13.16	(1.43)	−3.31**
関係性得点	36.16	(3.76)	38.60	(3.28)	−4.44***
意味づけ・両親	12.83	(2.07)	13.44	(1.82)	−2.02*
意味づけ・友人	12.33	(2.20)	12.91	(1.96)	−1.78†
意味づけ・恋人	13.55	(2.02)	13.85	(1.71)	−1.02
意味づけ得点	38.70	(5.37)	40.19	(4.48)	−1.92†

***p<.001,**p<.01,*p<.05, † p<.10

アイデンティティと対人関係性の関連

アイデンティティの形成と対人関係性の関連を検討するために，相関係数を算出した（Table 5）．その結果，アイデンティティ得点と，関係性得点（r=.15,p<.05），意味づけ得点（r=.19,p<.01）との間に有意な正の相関が見出された．関係性と意味づけの下位尺度得点に関しては，関係性得点のうち友人との葛藤場面での得点（r=.16,p<.05）が，また意味づけ得点ではすべての場面での得点の間に有意な正の相関が見られた（両親 r=.15,p<.05；友人 r=.17,p<.05；恋人 r=.16,p<.05）．

Table 5. アイデンティティ得点と対人関係性尺度の各得点との相関係数

関係性・両親	.05
関係性・友人	.16*
関係性・恋人	.14
関係性得点	.15*
意味づけ・両親	.15*
意味づけ・友人	.17*
意味づけ・恋人	.16*
意味づけ得点	.19**

**p<.01,*p<.05

考　察

本研究では対人関係性を，①葛藤場面に対する対処方略における関係性のレベル，②葛藤体験に対する意味づけの深さという２つの観点からとらえた．関係性と意味づけの間には，下位尺度までみても全般的に正の相関が見られたことは，次のことを示唆するものと考えられる．すなわち，それらの二側面が，例えば，①他者と自己の視点の違いを認識⇒②他者のことをより理解⇒①自己と他者間での相互調節を重要視⇒②対人関係調節の難しさや意義を知る⇒・・・といったように互いに影響を及ぼしながら，全体としての対人関係性を高めている可能性である．

さらにそれらの対人関係性尺度の得点と，アイデンティティ尺度との得点間に（関係性得点・意味づけ得点ともに），有意な正の相関がみられ，そのうち意味づけ得点との相関の方が，比較的強いものであった．この結果は青年期のアイデンティティと，「重要な他者との関わり方」との間に関連があるということを示している．これは先行研究と同様に，個としてのアイデンティティが，他者からの分離や自立によってのみでなく，他者との関係性のなかでも形成されていることを示唆するものである．本研究の結果はその関係性の中でも特に，葛藤場面での重要な他者との関わりあいや，葛藤への対処として他者との相互調整ができること，またそれらの体験を意味づけ，自分のこれか

らの糧にすることができることが，アイデンティティの形成と強く関わっているということを示すものと考えられる．これらを総合すると，対人関係性においても特に葛藤体験に対する意味づけ，すなわち他者とのかかわりの中で起こったことを分析したり，検討したりすることや，それらを通して自己や他者を理解することがアイデンティティ形成にとってより重要であると考えられる．守屋（1982）は，自己認識の発達に関して，他者が自分に対してどのような働きかけをしてきたかを吟味することを通して，まず他者を認識し，そして，その他者と区別するプロセスにおいて自己イメージがつくられると述べている．すなわち，同じ体験をしても，そこからただ“即物的”に自分の意見や考え方を引き出す（杉村，1999）のではなく，より深く反省したり，自分なりに解釈したり，ときに相手と話し合うということが，その体験を通して，アイデンティティを高められるか否かを決める重要な要素であると言えるのではないだろうか．

本研究の結果によると，アイデンティティ尺度得点には性差はみられなかったが，対人関係性においては，関係性，意味づけの両側面の得点において，女性のほうが男性よりも有意に得点が高かった．このことから，女性のほうが男性よりも，葛藤場面において相手やテーマに関わらず，他者と自己の視点を認識し，それらの違いについて相互調整という方法をもって解決することが示された．また，意味づけについても，女性のほうがより深く自己の体験について洞察している傾向があると考えられる．以上のことは，女性のほうが男性よりも自己と他者のかかわりの中からより多くのことを吸収しようとする姿勢をもつ可能性を示唆している．

これらの結果は，アイデンティティ形成における関係性の性差についての知見を与えるのと同時に，発達段階に注目することで以下のような考え方に発展させることができる．アイデンティティとは，かつて Erikson（1950）により，青年期における心理社会的課題として提唱されたものである．しかし，アイデンティティの発達を，青年期のみにとどまらず成人期，老年期にまで拡大したライフサイクル的視座のもとでとらえようとした研究は，1980 年代以降，漸増しており，今日，成人期・老年期のアイデンティティ発達に対する社会的，学問的関心は高まりつつある（鑪・宮下・岡本，1998）．例えば，Waterman（1982）は，Marcia（1966）により提唱された青年期のアイデンティティ・ステイタスの発達を，成人初期にまで拡大してとらえようとする「アイデンティティ発達の連続的パターン」のモデルを提出した．このモデルは，二つの重要な問題を示唆している．第一に，Marcia（1966）の提唱したアイデンティティ・ステイタスは，青年期特有のものではなく，必ずしも多くの人々が青年期にアイデンティティ達成というステイタスを獲得し，それが成人期にそのまま維持されていくとは限らないという点である．第二に，アイデンティティ・ステイタスは，必ずしもより成熟した方向へ移行するわけではなく，より下位のステイタスへ変動する可能性もあるということをこのモデルは示している．この研究は，Whitbourne & Weinstock（1979）の発達モデルとならんで，成人期のアイデンティティ発達過程の研究にも有益な視点を提供した．すなわち，成人期には，青年期に獲得されたアイデンティティが，必ずしも安定して持続されていくわけではなく，成人期の新たな危機に遭遇して，再び変化・変動する可能性もあるということである（鑪・宮下・岡本，1998）．このように，アイデンティティ発達をより広く，ライフサイクル的視座のもとにとらえると，青年期におけるアイデンティティ形成は，成人期・老年期までつづくアイデンテ

ィティの発達の基礎，もしくは基盤となるものと考えることができるだろう．青年期を，より発達したアイデンティティを獲得する，成人期の前段階としてとらえるのである．岡本（1997）は，アイデンティティを「個としてのアイデンティティ」と，「関係性にもとづくアイデンティティ」の2軸でとらえ，それらの二つがともに等しく重要な意味を持ち，統合されている状態を，大人としてのアイデンティティ達成状態とする考え方を提唱している．この場合の「関係性にもとづくアイデンティティ」は，「自分は誰のために存在するのか」，「自分は誰のために役に立つのか」といったテーマを中心としてもち，他者の成長や自己実現への援助へ向けて方向付けられている（岡本，2002）．しかしまた，このようなアイデンティティのとらえ方は，男女両方に共通することといえども，やはり，現在の社会では，子を産み，育て，家事をして家族の世話をすることを要請されやすい女性のアイデンティティの特徴を，より説明するものであるといえよう．これらのことを踏まえると，青年期において，女性のほうが男性よりも関係性・意味づけともに高い値を示したことは，成人期の前段階である青年期での対人関係性が，成人期における「関係性にもとづくアイデンティティ」の形成とも何らかの形でつながるのではないかという可能性を示していると考えられるだろう．これらのつながりが，より具体的にはどのようなものであるのか，縦断的に研究していくことがこれからの重要な課題である．

引用文献

Erikson, E. H.　1950　*Childhood and society.* New York：W.W.Norton.　仁科弥生（訳）1977,1980　幼児期と社会1・2　みすず書房.

Josselson, R. L.　1994　Identity and Relatedness in the life cycle.　In H. A. Bosma, T. L. G. Graafsma, H. D. Grotevant　&　D. J. de　Levita　(Eds.), *Identity　and　development：An interdisciplinary approach.*　Thousand Oaks, CA：Sage.　Pp.81-102.

Kroger, J.　1997　Gender and identity：The intersection of structure, content, and context. Sex Roles, 36, 747-770.

Marcia, J. E.　1966　Development and validation of ego - identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.

守屋慶子　1982　心・からだ・ことば　ミネルヴァ書房.

永田彰子　2002　関係性から見た生涯発達―アイデンティティを育てる土壌としての「関係性」―　岡本祐子（編著）　アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房　Pp.121-147.

岡本祐子　1995　成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について―理論的展望と生活レベルに見られる2，3の問題―　広島大学教育学部紀要 第二部　44, 145-154.

岡本祐子　1997　中年からのアイデンティティ発達の心理学　ナカニシヤ出版.

岡本祐子　2002　ライフサイクルとアイデンティティ．岡本祐子（編著）　アイデンティティ生涯発達論の射程　ミネルヴァ書房　Pp.3-57.

杉村和美　1998　青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究，9, 45-55.

杉村和美　1999　現代女性の青年期から中年期までのアイデンティティ発達.　岡本祐子（編著）女性の生涯発達とアイデンティティ―個としての発達・かかわりの中での成熟―　北大路書房 Pp.55-86.

杉村和美　2001　関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求：2年間の変化とその要因　発達心理学研究, 12, 87-98.

鑪　幹八郎・宮下一博・岡本祐子（編）　1998　アイデンティティ研究の展望Ⅴ－1　ナカニシヤ出版.

Waterman, A. S.　1982　Identity development from adolescence to adulthood：An extention of theory and a review of research. *Developmental Psychology*, **18**, 341- 358.

補助資料

対人関係性尺度

＜Ⅰ＞両親との葛藤場面

Aさんは、今、就職のことで両親と意見が対立しています。Aさんには前々から興味のあった仕事があります。そこで会社の規模や場所にこだわらず、興味のある仕事ができる会社に絞って就職活動をしようと思っています。しかし、Aさんの両親は、Aさんに地元に帰ってきて欲しいと思っており、実家から通える地元の企業や地元の公務員試験などを受けなさいと言っています。

＜Ⅱ＞友人との葛藤場面

Bさんは、今、学業のことで友人と意見が対立しています。Bさんと友人は、授業で一緒に共同研究をし、発表することになりました。Bさんは、せっかくやるのなら、時間がかかっても、できるだけレベルの高い内容の研究を発表したいと思っています。しかし、Bさんの友人は、アルバイトやサークルがあって忙しく、共同研究にあまり時間をとられるのは困ると言っています。

＜Ⅲ＞恋人との葛藤場面

Cさんは、今、結婚のことで恋人と意見が対立しています。Cさんは、大学卒業後数年は、独身のままで精一杯仕事に打ち込みたいと思っています。しかし、Cさんの恋人は、結婚と仕事は別なので、卒業したらすぐにでも結婚したいと言っています。

上記3つの場面に対する以下の質問項目への回答を求めた.

対処法略における関係性のレベル

「1．反対」「2．やや反対」「3．やや賛成」「4．賛成」の4件法で回答

1．両親（友人，恋人）の言うことには耳を貸さないで、あくまでも自分の意見を通そうとする。
2．互いの意見の異なる点や、長所・短所についてもう一度よく考える。
3．できるだけ両親（友人，恋人）の意見にそえるような解決策をさがす。
4．できるかぎりお互いの意見を尊重できる解決策をとろうとする。

葛藤体験に対する意味づけ

「1．まったくそう思わない」「2．あまりそう思わない」「3．ややそう思う」「4．かなりそう思う」の4件法で回答

1．この葛藤体験は、A（B，C）さんにとって面倒なだけで、結局時間の無駄にすぎないと思う。
2．この葛藤体験を通して、A（B，C）さんは自分の性格や考え方などをよく知ることができると思う。
3．この葛藤体験を通して、A（B，C）さんは両親の気持ちや意見を理解することになると思う。
4．この葛藤体験は、A（B，C）さんにとって、人間関係を調節することの難しさや大切さを知り、両親との関係を改めて見つめるよい機会になると思う。